ビチレブ島東部における伝統的共同体の貝類漁業

鹿児島大学多島圏研究センター
河合渓

ビチレブ島沿岸域村落は海に面した場所に集落を形成しており、村人は農業を行うと共に海洋環境を生活内に取り入れ生活を行っている。本研究では海洋資源（特に貝類）と村との関係を調べ、そこから環境をうまく使った持続的資源利用について考察することを目的にしている。平成 17 年度の調査では主に村で漁獲されている貝類種類とその採集方法を調べると共にその漁の持続的要因を解明し、市場経済との関係を調べる事を目的にした。

貝類の漁業は主に昼と夜の潮が引いたときに行われている。昼の潮干狩りの漁では(a)、塩が引く時間に小船で海に出る。夜の漁はランプを持ち干潟にでる(b)。夜の漁は主に魚や蟹を対称にしているが、貝類の採集も行っている。

(a) (b)

村前の海は小さな湾になっており、潮が引いたときは水深が数十センチになっており竹竿だけで沖に出て行く。この村には船外機つきの船はないため必然的に竹竿が主な駆動力になっている。この湾の沿岸にはマングローブが茂り、湾内には川が 3 本流れており、この川が多くの土砂を湾に供給している。3 本の川の流れは沖合でぶつかり合い、これらの川によって運搬された土砂がここにたまり干潟を形成している。干潟は川がぶつかり豊富な土砂により形成されるので、干潟の形は陸から海にかけて細長い形を形成している。また、マングローブからの有機物を川が運びこみ湾内が有機物量の高い環境になっている。従って、この地域は濾過食性の貝類にとって最適な環境になっていることがわかる。この環境は、当然、貝類だけでなく魚類の分布にも大きな影響を与えており、魚類も豊富であると考えられる。

この村では約 9 種類の貝類を食用として利用していた。8 種類が濾過食者で 1 種類が捕食者であった。最も漁獲量が多いのはカイコソ（リュウキュウサルボウの仲間）であった。この貝類は村落での利用と共に市場へも供給されており、村での現金収入の重要な一面を占めている(c)。この貝は潮が引いたときでも海水に浸かっている海藻内に主に分布するが、干潟にも分布する。干潟での漁獲方法は砂の上を歩きながらカイコソが出している水管を目視で見つけ砂中から取り出す。日本の潮干狩りのように砂を掘り起こしそこに生息する貝類を見つけ出す方法とは異なる。また、海藻中に生息するカイコソに対してはそこに船で行き、船を停泊させ、海水中に手を入れ海藻内のカイコソを手探りで探し出す。このときも特に採集用の器具は用いない。これらの漁獲方法では大型個体しか採集できないため、

結果として小型個体へは低い漁獲圧を与えていることになる。同時に漁民の感覚にも小型個体を取ると将来の漁獲量が減るということをきちんと認識しており、小型個体を採集しないようにしている。おそらくこの感覚は長年の間に蓄積されてきた知識の一つであろう。これにより将来の資源にはあまり影響を与えていないことがわかる。

(c)

このようにこの地域は濾過食性の貝類にとって最適な生息環境、必要最低限を漁獲する方法、漁民の乱獲を起こさないという感覚などが正常に維持されているためにこの場所では持続的漁獲が維持されていることがわかる。しかし、近代化の流れに伴いこれらのどれかの要因が変化することが十分に考えられるが、そのときは十分に配慮していかないとカイコソ漁の存続の危機に見舞われるであろうし、この地域の重要な現金収入が途絶えることになると考えられる。